

福祉実践について——(2)——

保延 成子・三角 同・本間 真宏

(昭和63年9月30日受理)

A Study of Social Work Practice——(2)——

Shigeko HONOBÉ, Hitoshi MISUMI and Masahiro HONMA

(Received September 30, 1988)

はじめに

まず、次のような叙述からみていくことにしたい。「海辺では過去と未来がくり返されている。時の流れの中で、あるものは消え失せ、過ぎ去ったものが姿を変えて現われてくる。海の永遠のリズム—それは潮の干満であり、打ち寄せる波であり、潮の流れである—の中で、生命は形づくられ、変えられ、支配されつつ、過去から未来へと無情に流れていく¹⁾」。

私たちは昭和62年度の特別研究費の申請にあたって、そのテーマを「職業としての家政学」とした。その意図するところについてはすでに述べておいたとおりである²⁾。そこで2年目の計画として、10年ほど前に卒業した人たちにアンケートを実施し、考えを伺ってみようということをいっておいた。とかく眼の前にいる学生たちだけを相手にしていると、その対応にのみ追われ「不透明」の時代といわれる今日の社会を、ただ浮遊しているにすぎなくなってしまう。このような状況にあった私たちにたいして、いろいろな刺激を与えたものは多かったが³⁾、アンケートを実施するうえで参考になったのは青井和夫氏らの調査であった⁴⁾。

この調査の目的は次のように書かれている。「確かに在学生の調査は当面の大学の教育方針を考える場合には貴重な資料を提供してくれるものであるが、より長期的な見透しを得るには、現在の在学生の調査だけでは不十分ではないか」(傍点・原文)ということ。そこで卒業生を1924(大正13)年まで逆のぼり、他方1982(昭和57)年の卒業生までを4つの世代(コホートないしは年齢層)に分けて、(現在の学生たちが)、直接インタビュー
児童学科・保育科

を実施してまとめたものであるという。

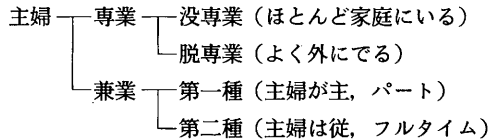
私たちとしても、そのような調査をいつの日にか実現してみたいとは思っているが、今の体制ではとても望めぬことであるといわなくてはならない。けれども、たとえ小規模なものであっても、できるだけホンネをとらえることができるような調査にしたいということであった。

アンケートの実施状況

問うべき項目はそう多くなく、できるだけ平易に、回答者が自然にホンネをいえるものでなくてはならない、ということはアンケート調査の常識である。私たちは次の9項目に絞りこんだ。

(1)卒業後のライフヒストリー

(2)現在の状況



(3)学生の頃を振り返って

(4)今の生活における当面の課題

(5)現在、地域社会において活動しているもの

(6)これからの女子教育や家庭のあり方について

(7)21世紀における家政学や保育について

(8)いま大学(短大)にのぞんでいるもの

(9)自由記述

このアンケート用紙を昭和63年3月半ば、昭和53年3月卒業の短大生、同年卒業の学部生を中心にその前後の卒論担当学生たち139人に郵送した。そのうち回答のあったのは43通、返送されてきたのは6通であった⁶⁾。みら

れるように回答率はかなり低いものとなってしまった。もともと数量的な処理をするつもりはなかった。またフリーに書いてもらったものを類型化し、示してみたところで、彼女たちの真意がわかるわけではなかろう。以下の叙述にあたっては、彼女たちの表現を大事にしながら吟味してみることにしたい。

アンケートのなかから

(1)学生の頃を振り返って

まず学生時代をふりかえてみてもらった。ほとんどの人が有意義な時代であったと述べている。そのなかでとくに多かったのは、学生という地位を生かした自由な時間で何かを求めつつ、「自分」というものをさがしていた、というものであった。自由な時間ということは、その人なりに過した事、ボランティアあるいは、遊び、アルバイト、おけいこ事など、あらゆる面を生かし、意欲的に自分から何かをしようという強い気持ちからのようである。家庭に入ってから考えられないような、「ゆとり」であったというものが多い。彼女たちはとにかく必死になって自分というものを発揮し、全てのエネルギーを出していたように思われる。それらの時間を、自分なりに視野を広げることに費していた。時には研究室での討論などで「新しい知識にふれることができた」と述べている者もある。

そして今、子どもをもち育児にかかわっている人たちは、「育児は教科書通りではない」ことを強く感じている。また、「豊かな時間の中で、質の良い授業を受けていたのに、当時は理解する力、学びとる力に欠けていたのが今にして思えばもったいない事である」とも述べている。そして、「保育の仕事に就いて、2・3年たつてようやくあのことは、この事だったのかとのみこめてきた事も多い」という。さらに「忙しかったが、楽しかったし何か暇をみつければ好きなことができた。今、おちついた生活ができるのも、学生時代、自由な生活をおくり、それと同時に、責任や自覚も必要になり一歩前進した」からと知っている者もあった。

これらのことから、学生時代に自分に与えられた自由な時間、またゆとりをもって学生時代を送った人たちのほとんどがいま現在、与えられた生活のなかで、それまでに学んだ何かをいかしていることが伺われよう。他方、不満であったというものはどうであろうか。免許取得という目的のみにこだわりが多かったり、時間の制約

(つまり、通学時間、あるいは、カリキュラムの過密など)におわれ、何ひとつとして納得のいくものがみつからないまま卒業してしまったというものである。ここからいえることは、とにかく積極的に何かをし、時間を有効に使うこと、それができなかったことが心残りとして(後輩たちに対して)あげられているということであろうか。

卒業して10年余。そこにはまだ学生時代を鋭くふりかえている眼がある。これからの生活のなかで、それはどのように変化していくのであろうか。

(2)今の生活における当面の課題

回答を寄せてくれたほとんどの人達が主婦となり子どもをかかえているということは言うまでもない。したがって多く述べられていることは、「家庭・家族」「子育て」といった面からのとらえ方である。すなわち「家族の健康」とか「子どもの教育」そして「老後の問題」などが中心的に考えられている。

また、ここで問題とされているものに、女性としての自立ということがあげられていた。それは、現在専業主婦であるという人達からも多く書かれていた。兼業主婦であるという人からの回答によると「仕事と子育ての両立」とか両親との同居による「家庭」のあり方についての問題などであった。これからのことは、どちらの主婦の立場であっても、自分自身の問題として言われているのが特徴的である。すなわち「自分の時間をつくりたい」というもの、「女性として母親として、妻として精神的な面で自立したい(ひとりの人間として社会の一員でありたい)」というもの、さらに「無駄のない生活」を考えるなかで「生活に身近なところで社会復帰の道を考えるうえで、何かを勉強したい」とか「これから自分のできることを考えたい」など、何らかのかたちで女性としてできることを何かやってみたいというものである。彼女たちが学生の時から考えていたことであろうが、それが本学で学び卒業し、就職し、そして結婚し子育てに励んでいるなかで、つねにこれらのことを考えていることが伺えるのである。ここに着実に(社会を変革しつつある)女性の生き様をみとるのは、けっして私たちのみではないと思われる⁷⁾。

(3)現在、地域社会において活動しているもの

特徴的なことは子どもを通しての活動が多くみられる

ことである。このことは、アンケートの回答者たちが、ちょうど子育ての真最中にいるということからも妥当する。その内容としては、「幼稚園の父母会」とか子ども会」そして「児童館の幼児の集い」や「町内会(子ども会)」での仕事、また「親子映画」などがあげられている。さらに日常の生活に密着している(と考えられる)「生協」がほとんどの回答に多く出てきている。その他「職場関係の会」や「地域での活動」という表現で、自分の趣味を生かしたサークル活動などに参加をしている様子が伺えた。

ところで「女性をめぐる変化」として、戦後を三つの時代に分けて論じているものがある⁸⁾。それによると第三期(1970年代以降)は自由・平等思想の普及と高度経済成長に支えられた女性の就労が、生活に大きな変容をもたらした時期とされている。教育水準の向上、消費物資の充足、核家族の浸透などが女性の生活領域を家庭中心から職場や地域へと拡大していった。こうして地域は専業主婦の自己実現を求める場としてあらたな活動が展開されるようになったというのである。けれども彼女たちのこれからの活動のなかで、地域とどのようにかかわっていくのか、ということの考察について、私たちはもうしばらくの時をおきたいと考えているところである⁹⁾。

(4) これからの女子教育や家庭のあり方について

このことについて、卒業生がどう考えているのかをみていこう。ここでは、まず「しつけ」について、そして「社会に出てからの自立」ということについての記述が多くみられたことをいっておかなくてはならない。ここで「しつけ」とは、社会一般でいわれている基本的な生活習慣ということであろう。具体的には「核家族化が進み、人間関係が簡略化され、人に対する思いやり、礼儀の欠如を感じる」というものがあった。それは核家族化のなかで、自らの生活を見直すということであろうか。また「子どもたちなどと共に『家庭のあり方』について考え、伝え、見つめなおしたい」というものもあった。

さらに、これまでにも多くみられていたように、「自立のできる女性に育て欲しい」とか「社会に出てからいかにさせるものを女子も学ぶべきである」また「その子の個性を見つけ、どのようにのばしていくか。社会の中で本当に自立できる実力(技術)を身につけることの重要性」という記述など、母親自身がおそらくもっているであろう問題とだぶっている面がみられたこともいってお

くべきであろう。

ところで私たちは男女の別を考えずに教育を考えたいという記述があったことに注意しなくてはならないと思っている。けれども、そういう考え方があったとしても、現実にはどうしても男女の役割分担にこだわり、それが陰に陽につきまとっていることもみのがすことはできないようである。たとえば「女子も社会生活を通して政治、経済を考えなければいけないと思う。男子も仕事のみならず家庭のなかでも積極的に参加してほしい。ただ今後高齢化社会にむけて、女性の負担は多くなるでしょう。そのことも大学で『男と女』の役割を考えてほしい」という記述があった。また「男性・女性それぞれの特質をいかした家庭のあり方が望ましい。男・女それぞれ認めあい生きていけることの大切さ」をいうもの、「男女の区別なく、人間として生きていく上で自然に共生できる社会をつくり出すことのできる教育を目指してほしい」というものなどがあった。

このような回答から考えられることはどのようなことであろうか。子どものしつけ、男女の役割分担などについて述べられていることをみると、そこには男性は男性として、女性は女性としてという意識をわきまえたうえで、あるべき男女の平等が述べられているように思えるのである。意識としてはたしかに「女性の自立」ということが強くあるように思われる。しかし根底には女性は女性としての役割、男性は男性としての役割をしっかりとったうえで、ということのようである。保育について勉強した彼女たちのなかに「働く母親たちが危ない¹⁰⁾」とともに、子育て(しつけ)を、夫と共にやっというような姿勢をみるのが大事なことと思われる。

(5) 21世紀における家政学や保育について

さて「21世紀は家政学(学部生に)、保育(短大生に)の重要性が増すという意見についてどう思うか¹¹⁾」、アンケートしてみた。ここではほとんどの人が、「人が生きていくための基盤となるものは何なのか」という観点からとらえているのが特徴的である。そして衣・食・住という人間をとりまいている環境に対する危機感が強く感じられることをいっておかなくてはならない。それを実際にあげてみると次のようになる。

すなわち「自分の一生をどう過していくか」ということ。それは、これから高齢化社会にむかっていくなかで、ほとんどの人たちが自分の老後の過ごし方について問題と

しているということである。このことは男女を問わずに考えていかななくてはならないことであるという。回答してくれた多くの人たちが、男性もそのことにむかって考えてほしいという意見を述べている。たとえば「公開講座などに参加して、若い人たち、子ども等もまじえて老後を楽しくすごせたらと思う」という記述。さらに「人の一生の過し方など社会福祉、児童福祉など、社会環境の土台作りになるような話し合いをしてほしい」。また次のような意見もある。「核家族化が進み、だんだん閉鎖的な社会になってきつつある。その反面、物が豊富になり、欲しいものが手に入ると何が大切であるかが見失われてきている。家族のつながりも、物によってつながれ、本来家庭のもつうるおいがなくなっている。女性としてのこれからの位置は大きく常識としての家政学、さらに生活を守るための家政学等と、知識は当然必要な時代となるでしょう。そのためにも本物をみきわめ、考えられる力(学問)の重要性は増すと思う」というものである。これらは社会の変化のなかで進む家族関係の乱れを心配しているといえよう。すなわち、次のような意見「学歴第一主義を求めめるために、勉強をすること以外、子どもに何をすべきかを伝えることのできない親・子どもの要求を何でも受け入れることがやさしいと思っている親」などをみると、必然的ともいえる家族の破綻を防止するためにも、家政学の重要性が求められていると考えられよう。こうして「人間が人間らしく生活するために、社会の単位と考えられている『家庭』の崩壊ということについて“人間の生活”について家政学で考えていかななくてはならない」ということになるのである。

また次のような記述もみられた。すなわち「家・家庭・家族と人が生きていくための最も大切なものを、限られた紙面で具体的なことを書くのは難しいが、今身近にいる人達がどれだけその大切さに気付き、感じ、考えて生きているか疑問である」とか「人間が生きていくためにはより豊か(精神的)に生きていくことが大切である」そして「家政学は人間が生きている上ですべての基本となるものである。老人問題・子どもの諸問題など今よりも問題は多くなると思う。頭だけの知識ではなく、実践直結の学問、対処していくための人間形成さらには人格形成が今よりももっと重要視されなくてはならないと思う」と述べられていることにいっそう留意すべきであろう。

これからの保育については、次のようなことがいわれ

ている。「これからは家族関係の重要性が増すのではないかと思われる。多種多様な情報や育児産業の進出によって子育てに、大人の便利さだけをおしつけ、子育ても簡略化され、子どもが歪んでいっても、それすらわからない親が多く、人とのつながりをもちたがらない家族、母子家庭も多い。ということから家政学が大きく人間学の立場に立つものが必要性を増すとと思われる」というものである。これらのことからいえることは、何といたっても人間形成の大切さ、重要性である。それは人ひとりがいかに生きていくか、という「生きがい」の問題でもあろう。その人が生きていくためにはすべての人がどのような形で「生きがい」をもち、それをどのようにいかしていくのかということが、共通して問われているようにも思われるのである。

家政学部の一員として、保育実践を教授する一員として、私たちがこれからの研究において、何をしていかななくてはならないか。これらの意見から貴重な示唆を与えられたのは、私たちのみではないであろう。

(6)さしあたってのまとめ

少ない回答数であり、生硬とも思われる文章であるが、全体を通していえることはどのようなことであろうか。どうも家政学の再確認ということが問われているように、私たちに思われるのである。それは子育て、女性の自立、高齢化社会にむけての対処の仕方、男性への家政学、などいろいろな面での見直しということなのではなかろうか。とりわけ多くとりあげられているのが、“女性の自立”という事であった。このことは必ずしも女性が外へ出て働くということのみではなく、家庭内において主婦としての位置をいかに守っていくか、いかに重要な位置にいるかという事の確認でもあった。子育てにしろ、家庭を守っていくなかで、あたりまえのように過ぎ去っていく毎日の生活のなかで、女性はどのように生きていくか、ということである。

現代社会において情報化が進むなかで、つねに女性として“あたりまえといわれてきた平凡な生活”から、もっと自分をいかした“生きがい”のある生活を考えていかなければならないように思われる。回答のなかで兼業主婦・専業主婦にかかわらず、女性としての責任を感じていることは確かである。女性の自立を求める意見においても、ほとんどの人たちは、まず女性としての役割分担をきちんと守っていく、まずは、女性は女性、男性は男

性であるということから出発しなくてはならないという。女性の自立をめざしてはいても、子育ての根底にはやはり、女性としてのやさしさは保たれていなければならないと考えているようである。

一方、核家族化が進むなかで、以前のような大家族制を見直してみようという考えもみられる。進行する人間関係の縮小ということで、すべての自分中心の生活を楽しめ、家族のもつ本来のあたたかさを感じとれないようになっていのではないか。子育てに関しても、母親自身の身勝手な行動を憂慮し、簡略化された育児用品の使用や食生活における外食産業の利用など、楽な方へと生活が傾いていることを厳しく指摘している。彼女たちは専業主婦であれ兼業主婦であれ、生活のなかでの時間の束縛がかなり減少してきているなかで、その時間的余裕を有意義に利用していくこと、そうすることでその人なりの活動範囲が広がっていくことを考え実践しようとしている。しかし、その反面、その時間を怠惰に過してしまうことになれば、その人にとっては大きな損失となってしまうことも注意深く指摘しているのである。

たしかに「女性の自立」ということを考えてみても、今すぐどうこうなるものではない。彼女たちは意識のなかで堂々めぐりを繰り返してしまっている。けれども専業主婦として兼業主婦にしても、これまで述べられてきた多くの回答にみられるように女性の自立ということはとにかく「自分自身の生き方」に問題があることを鋭くとらえている。つまり自分にとって「生きがい」をどうとらえているかということであり、自分自身の生き方をつねに考え直してみる必要を強調しているといえよう。

さいごに、これまでに述べられた多くの問題について、数少ない女性だけの意見であり、考え方であるという偏りがあることはいうまでもない。そして家政学というものは人が存在する限り、必ず男女で作られる家庭の最低限の基本的生活がなされるために必要なものであることもいうまでもない。そこで考えられるのが、やはりこういった問題については、男性側の意識がどうであるかを知ることが必要になってくるということではなかろうか。現在、女性だけに家政学や保育の重要性が問われているようであるが、このアンケートでは大部分の人たちが、男性の家政学に対する知識をもっと身近なものとしてうけてほしいということが述べられている。今後の課題としては男性側からの意見をとりいれながら、これらについて考えていかななくてはならないということである。

おわりに

アンケートの最後は「あなたが家政大学に望むもの」は何か、ということであった。約半数の人びとが「卒業生のみならず地域の人々への公開講座など」を希望している。また「再就職のための教育プログラム」や「新しい分野に挑戦するための援助」も求めている。ここでは直接には問うことをしなかったが、「女子大学の新しい動きとして共学化への関心も見られるが、むしろ女子大には女性の再教育機関としての役割が期待され¹³⁾」という指摘とあわせて、今後の方向を考えていくことが必要であろう。

ところで回答をザッとみた限り、将来についての不安一すなわち高齢化社会情報についての過剰反応(?)—は多く述べられているが、少なくとも現在において「ゆれ動く現代家族¹⁴⁾」という状況はみられない。もちろん回答には表われない、他人には伺いもしれない問題を抱えていることはたしかであろうが、ここには出てこない。まずは家政学や保育を専攻した卒業生たちの健全なる家庭経営ということであろうか。

さて女性の自立ということについて考えてみよう。回答者のほとんどが専業主婦であるところから、その自己実現はまず家族のなかで、子どもや夫などのかかわりのなかで求められている。その状況は、次のような指摘とどのように重なりあうのであろうか。「女性に家庭系列の役割に専念することを期待する社会的価値体系のもとで育ち、生活する彼女たちもまた、人生の重心を家庭に求める傾向が強い。いや、大卒女性の場合、その傾向は一般の女性の場合よりも、さらに強いという方が正しいかもしれない。……家庭中心主義への傾斜が強いとはいえ、高度の教育を受けた大卒女性のうち、完全に家庭系列の役割に安住し、それに満足しているものは、多数派ではない。……家庭に生活の中心をおきながら、遠心的な生活の拡大と役割を対象として自覚化していくもの数も着実にふえていだろう¹⁴⁾」。

アンケートに回答された卒業生たちとは別に、このような叙述の前段階にある「主婦論争」を想起することが必要であろう。かつて「婦人労働者対主婦という二元的図式化¹⁵⁾」がみられた。それは「主婦の行動をしる性別役割分業の枠組は同時に仕事をもつ婦人をもしるものであることがあきらかな以上、主婦が労働者になるこ

とによっていま一步解放されたなどと」いう短絡的な論議をさらにのりこえて、今日における女性の自立という問題が問われていることを知らなくてはならないのである。そのひとつの方向として、女性（もちろん男性もいうまでもないのであるが）の「福祉実践」があると、私たちは考えている。たしかに「両立ならぬ、家事と仕事と市民としての社会活動と『三立』を果たす人々が数多く¹⁰⁾」なってきたかもしれない。けれどもアンケートの回答者たちはまず専業主婦として家事、育児に専念し、そのなかでさまざまな地域での活動をおこなっているのである。よく福祉専門職に従事している人やボランティアなどを行なっている人びとを指して「福祉実践」というようであるが、私たちは広く日常生活における活動そのものが福祉実践ではなからうか、と考えている¹¹⁾。「職業としての家政学」とは今のところ、そう大袈裟な物言いとてではなく用いておきたいと思っているのも、そうした福祉観からであることはいままでもないことであろう。

ところで、制度としての「老人家庭奉仕員派遣事業」は昭和37（1962）年から開始された。それは昭和44年から「寝たきり老人対策」として、さらに拡大されて今日に至っている。行政改革のなかで「国がいうところの、真に福祉サービスを必要としている人々へのサービス供給¹²⁾」は、在宅障害老人への施策として現われてきているというシニカルな表現がある。それは今後、老人問題が老人自身の問題であるとともに、老人を介護する家族など介護者の問題としてクローズアップされていくことを示しているのであり、回答を寄せてくれた人たちの全てが感じとっている事柄であるといえよう。

これからの私たちにとっての課題はこれらの問題への接近にあたって、多少は遠回りのようではあるが次の二点にまとめてみることができる。ひとつは家政学の現状を理解するために、まず「家庭科」の教科書を分析してみることである¹³⁾。ついで「女性の仕事の二つの領域、すなわち職業における市場労働（お金を稼げる労働・賃労働）と家庭における家事労働（お金にならない労働・無償労働）の社会的・経済的な相互影響関係¹⁴⁾」について、さらに考えていくことである。

カーソンは冒頭に引用した文章に続けて次のように言う。「なぜならば、時の流れの中で海辺の形が変わると、それにつれて生命の様相も変化するからである。……海が新しい岸辺をつくりだすたびに、生物が波のように押

し寄せ、足がかりを探し、ついにかれらの社会をつくりあげる」。

私たちは家政学そのものが、カーソンのいう「海辺」のように思われる。そして私たちがそのひとつの潮になれるのではないかと。

註

- 1) R・Carson（上遠訳）：海辺—生命のふるさと、平河出版社（東京）1987 p307
- 2) 三角同、保延成子、本間真宏：福祉実践について—(1)—、東京家政大学研究紀要第28集所収
- 3) (a)岩波書店編集部編：これからどうなる—日本・世界・21世紀、岩波書店（東京）1983、(b)総合研究開発機構編：1990年代・日本の課題 三省堂（東京）1987
- 4) 青井和夫編著：高学歴女性のライフコース—津田塾大学出身者の世代間比較、勁草書房（東京）1988
- 5) この分類は上野千鶴子によるものである。このうち「没專業」ということについて、ある研究会で表現上やや問題があるという（主婦の側にたった）意見が出たことを付記しておこう。なお上野千鶴子：資本制と家事労働、海鳴社（東京）1985を参照のこと。
- 6) 本文に記したように、私たちとしては極力わかりやすいアンケートにした心算であったが、2児の母（專業）となっている卒業生からの手紙に「とにかく書かなくては……」と思っているうちに出しそびれてしまった旨、記してあった。おそらく多くの方々がそうだったのではないかとと思われる。なお43通のうち、専業主婦と答えているものは25通であった。
- 7) 天野正子：自立神話を超えて—女たちの性と生、有信堂高文社（東京）1987
- 8) <注3—b>の文献 p. 723
- 9) 原ひろ子・杉山明子編：働く女たちの時代、NHKブックス（東京）1985 p14
- 10) B・Berg（片岡・金訳）：働く母親たちが危ない、晶文社（東京）1988
- 11) <注2>の文献 p42
- 12) <注3—b>の文献 p760
- 13) 山根常男監修：ゆれ動く現代家族、日本放送出版協会（東京）1984 なお同書において「もちろん、女性の地位の向上は、ついには『家』の枠を破るで

- あろう」p39 という指摘に注目すべきであろう。
- 14) 吉田昇・神田道子編：現代女性の生活と意識，NHKブックス（東京）1975 pp. 234～7
 - 15) 国際女性学会編：現代日本の主婦，NHKブックス（東京）1980 pp. 141～2
 - 16) 樋口恵子：主婦が変わる時，海竜社（東京）1987 p17
 - 17) 本間真宏：地域福祉，京極他編 社会福祉 チャイルド本社（東京）1987 p183
 - 18) 岡本多喜子：在宅老人対策の政策展開，原田正二編著 シルバー・コミュニティ論—新しい在宅老人福祉の構築 ミネルヴァ書房（京都）1988 p140
 - 19) かつて次のような分析を試みたことがあったが，

- 「家庭科」の教科書については新たな視点，手法が必要となろう。なお三角同，橋口英俊，鮎川成子他：修身教科書にあらわれた理想的日本人像，東京家政大学研究紀要第19集所収を参照のこと。
- 20) N・Socoloff（江原他訳）：お金と愛情と間，勁草書房（東京）1987 p330

付 記

本研究は昭和62年度の特別研究費によるものであることを記し感謝します。なお本稿は保延成子「これからの保育者養成を考えるために—(1)」として第27回全国保母養成協議会研究大会で発表したものに加筆，修正したものである。